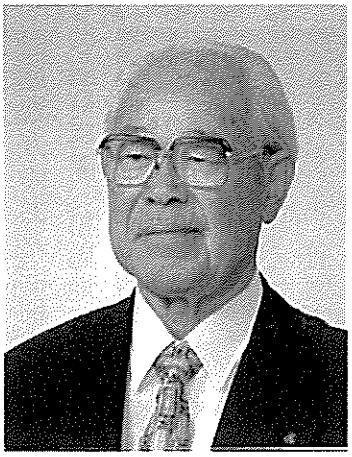
ふくしま県人会だより

第２９号
平成26年１月
福島県人会
北海道連合会

新年のごあいさつ

会長　神野　修



会員、ご家族のみなさん新年おめでとうございます。ご健勝とご多幸を心からご祈念申し上げます。

昨年九月、七年後の二〇二〇年にオリンピック東京開催決定のうれしい知らせがありました。

厳しい開催地選考の戦いに打ち勝っての決定だけに素直に喜ぶとともに、私たち高齢者にまたオリンピックが見られると歳甲斐もなく、新たな希望と夢をもたらしました。成功を祈りたいと思います。

思い起こせば、一九六四年の東京オリンピック開催で国鉄東海道新幹線開業、都内高速道路網開通をはじめ日本経済は目を見張るように向上し、日本人に希望と気力が漲っていたことを覚えています。

戦後十九年に開催されたオリンピックは、同時に日本の技術の飛躍的な発展と進歩をもたらして、わが国が経済大国となり世界の先進国としての位置を占めるに至りました。発展する基盤となるエネルギー分野にも及び電力エネルギーは原子力発電への大革命となり、産業や国民生活の質の転換をもたらしました。

しかしながら、平成二十三年三月十一日東北を襲った東日本大震災は、大地震、大津波、加えて福島県では東京電力福島第一原子力発電所の未曾有の原発事故災害で、生まれ育った「わがふるさと」が奪われる結果となり、心が痛みます。ふるさとの被災地復旧・復興が進まないまま越年されました皆さんに思いをいたし、心からお見舞いを申し上げますとともに、福島県人魂で復興を果たされることを願うものであります。

福島県人会北海道連合会も、会員の高齢化で会員が減少しています。このまま推移することなく、子や孫や、福島県に縁のある人々の加入を進め、会の発展と母県の復興応援のため力を合わせて頑張ろうではありませんか。

本年は函館市で総会が開催されます。一年に一度の再会でお目にかかり「ふるさと」を合唱する日を楽しみにしています。

「復興の流れをより確かに」

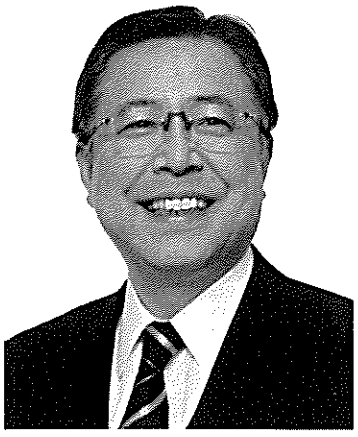
福島県知事　佐藤　雄平

謹んで新年のごあいさつを申し上げます。

昭和四十八年の連合会発足以来、ふるさとを同じくする方々の心のよりどころとして、会員相互の交流を深めながら、着実に発展を続けられておりますことは、誠に喜ばしい限りであり、会員の皆さんのふるさとを想う御熱意に心から敬意を表します。また、皆さんには、本県に格別のお力添えを賜り、厚く御礼申し上げます。

東日本大震災から三度目の新年を迎えました。

本県は、いまだ十四万人の県民の皆さんが避難を余儀なくされているなど、厳しい状況が続いております。



県では、二〇二〇年を目標年次に定めた新たな総合計画「ふくしま新生プラン」に基づき、「活力」「安全・安心」「思いやり」の三つの柱の下、一日も早く復興を成

し遂げようと、環境の回復や健康を守る取り組みなどの重点プロジェクトを全力で推進してまいりました。

県民の皆さんと一丸となって取り組んできたことにより、本県は着実に元気を取り戻してまいりました。観光地やイベント会場は多くの方でにぎわうようになり、子どもたちの元気な声がたくさん聞こえるようになってきました。

広野町や田村市都路地区の米や伊達地方のあんぽ柿の三年ぶりの出荷再開、相馬地区に続くいわき地区での漁業の試験操業開始、県営復興公営住宅の着工など、復興の動きが目に見えるようになってきております。

さらに、広野・楢葉沖の浮体式洋上風力発電の運転開始、福島空港メガソーラーの着工など、本県が目指す再生可能エネルギー先駆けの地のシンボルとなる取り組みも始まっています。

これまでの成果が形となって現れてきた、この復興への流れをより大きく、確かなものにしていかなければなりません。

そのため、まず、最大の課題である避難地域の復興に力を注ぎ、帰還に向けた対策と生活再建・安定のための対策を両輪で進めてまいります。

また、今年は、復興公営住宅の入居開始、環境創造センターや国際医療科学センターを始めとする各種拠点施設の着工、産業技術総合研究所の福島再生可能エネルギー研究所の開所など、これまでの取り組みがそれぞれ新たな段階に入ります。

さらに、この春のプレデスティネーションキャンペーンや、六月の日本陸上競技選手権大会を始めとする全国規模の大会、国際会議が今後も数多く開催されます。こうした機会を逃すことなく、本県の魅力と今を国内外にしっかりと発信してまいりたいと考えております。多くの方々に、福島に来て、見て、魅力を感じていただき、風評の払拭に全力で取り組んでまいります。

こうした、それぞれの局面を通して、本県の復興の新たな展開を見せてまいります。

「ふくしまから　はじめよう。」の合言葉の下、県民生活の安全・安心の確保、農林水産業の再生、産業の振興、インフラの復旧など、山積する課題を一つ一つ解決し、県民の皆さんに復興の進展をより実感していただけるよう「新生ふくしま」の形をお示ししてまいります。

終わりに、福島県人会北海道連合会の限りない発展と、会員の皆さんの御健勝、御活躍を心からお祈りいたしまして、年頭のごあいさつといたします。

連合会の活動

第四十二回福島県人会北海道連合会総会が開催されます。

日時　平成二十六年
　　六月七日（土）～
　　八日（日）
場所　湯の川温泉　湯元啄木亭
　　（函館市湯川町）

三年前、第三十九回連合会総会を函館市で開催する予定でしたが、東日本大震災直後のため、急遽、連合会役員により札幌市で開催いたしました。この度、会員皆様の強い要望と、また、函館県人会の皆様のご協力により開催することとなりました。

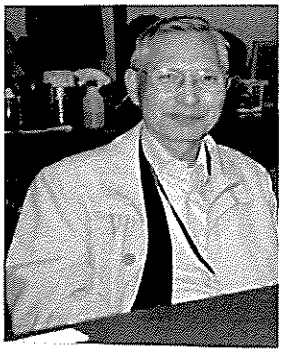
後日、ご案内を送付します。皆様お誘い合わせのうえ多数参加下さいますようお願いします。

（第四十一回総会の懇親会において函館県人会による歓迎の横断幕。）

会員通信

福島県人会…三十五年の交際（つきあい）

札幌福島県人会
理事　伊藤　忠孝



福島県！今、福島県は人口何人で、どんな市町村があるのか？

札幌県人会に入会させて貰ってから四回目の新年を迎えようとしている。最初に県人会に入会したのは昭和五十二年、翌年、福島県人会北海道連合会総会が小樽市で開催された。小樽県人会で一番若かったように記憶している。総会準備や総会当日の役割などでテンヤワンヤであったことを思い出す。あれから三十五年。転勤、転勤で県人会との繋がりも途絶え、ようやく落ち着いた平成二十三年、先輩から声が掛かり札幌県人会に入会させて頂いた。小樽県人会は無くなっていたのだ。当時の方は誰も残っていなかった。札幌県人会への入会の誘いは凄く嬉しく、即入会、総会・新年会に出席した。同県、同郷・同窓。ただ「同」が付くだけで飲む酒も美味しく、話も弾み、初めて会った人も凄く身近に感じ、何となく故郷の匂い・風が感じられる。県人会との直接の繋がりが途絶えても福島県との繋がりは途絶えさせたくない。生まれ、育った福島県会津の二十年、それが根本にあったのかなと思う。転勤で札幌に異動した度に福島県北海道事務所を訪れ、福島県人会名簿を頂き赴任地の県人会欄を開く、それが転勤三十年の空白期間における県人会との付き合いであった。たまに、県人会の方に会うこともあったが、それは本当に希なことであり、いま札幌県人会で諸先輩・大兄と盃を交わし、お話しできることは嬉しい限りである。

八月に短大同窓会の帰り、福島市の実姉の家に久し振りに立ち寄った。日中午後四時頃から一時間半近く付近を散歩した。近くの児童遊び場は子供一人の姿も見えず、除染作業中であった。真夏の日中で住宅街とはいえ、この散歩中、出会った人は自宅前の畑で作業中の家人らしき年配の女性二人のみであった。

県内五十九市町村、人口約百九十五万人。元気に外を走り、遊びまわる子供達の光景が見られる故郷「ふくしま」への復興願いが止まないこの頃です。

秋の日帰り旅行
～パークゴルフと温泉を楽しむ～

函館福島県人会
事務局長　古山　利勝

去る九月二十七日(金)、晴天の下秋のレクリエーションとして近郊でのパークゴルフと温泉を楽しみました。熊坂会長以下会員十名が参加しました。

会員の車四台に分乗して九時近くに函館を出発、一時間ほどで鹿部パークゴルフ場に到着。ここは秀峰駒ケ岳を間近に望める絶好のロケーションで心が和みます。スコアは二の次にして、よく整備された芝生の上で存分にプレーを楽しみ汗を流しました。

函館福島県人会　秋のレクリエーション

正午近くにプレーを終え、三十分ほどで昼食会場の「ひろめ荘」(南茅部)へ。ここは、送迎バス付や、ふた通りの温泉が楽しめること、それに「いか刺し食べ放題」などのもてなしで、最近、町内会や老人クラブなどに人気の施設です。

小休憩後まずはお腹を満たすべく全員での昼食。いか刺しや天婦

羅に舌鼓を打ちながら大方の人は完食しました。その後は各自ゆっくりと温泉を楽しみましたが、乳白色の硫黄泉は肌に心地よく、いくら入っていても飽きない感じで疲れを和らげてくれました。

午後三時にホテルを出発、途中の川汲峠は紅葉には未だ少し間がありましたが、移り変わる山並みの景色は目を楽しませてくれ存分にドライブ気分を味わいました。四時に市内に到着、散会しましたが、秋の一日を澄んだ空気と心地よい汗、それに美味しい食事と温泉で仲間との交流を深め合い楽しい一日を過ごすことができました。

同郷の『絆』に感謝

旭川福島県人会
相談役　砂山三絵子

双葉郡富岡町。私の出身地です。昭和三十二年、同じ町の主人と結婚、主人の勤めの関係で、式の翌日には青函連絡船に乗って旭川にやって来ました。農家生まれの私は、駅に降りた時「こんな大都会に住むんだ」と期待に胸ふくらませ新婚生活が始まりました。以来五十余年になります。三人の子宝に恵まれ孫も五人、幸せな日々を送っております。

著者のご家族

県人会との出会いは四十年前になります。当時の会長さんに誘われ入会しました。会に入ってから、先輩方に挨拶や友だちとの交わり方等、多くのことを教わりました。同郷の人たちとのつながりは楽しく、これまで夫婦して何十年も仲良くさせてもらえたことに感謝しています。特に年に一度の全道大会は、とても楽しみで欠かさず参加しています。昨年は地元の層雲峡ということで、私も接待係として副知事さんをはじめ多くの来賓の方々と接する機会を得ることができました。忙しい思いをしましたが、緊張してのお茶出しは良い思い出になりました。同郷の方々と温泉に入っては故郷に思いを寄せ、近況を報告し合う。時には歌い踊ってと本当に楽しいひとときです。私も好きな「二輪草」（今年七月「ＮＨＫのど自慢大会区予選」出場）を歌い、更に親交を深めることができました。

平成二十年四月、主人と一週間かけて自分が生まれ育った富岡町を中心に旅行してきたことが昨日のように思い出されます。震災前だったので、実家（本家）や親戚の大歓迎を受け、故郷を出て旭川に来てからの五十数年間の出来事に話が尽きませんでした。震災で、親戚を含め多くの皆様がご苦労をされている現在、ふるさとを支えている県人会に心から感謝するとともに、その会に参加できる自分をうれしく思っています。

八十歳を過ぎてつくづく思うことは「同郷の『絆』はいつまでも忘れられない。そして、同郷の皆様は善い人ばかりで本当に良かった」という感謝の気持ちでいっぱいです。これからも母県への思いを胸に、また、皆様との絆を大切に主人共々健康で長生きし、後継者育成・一家和楽の人生を築いていきます。

前列左から２番目が著者

小さな絆

美幌町福島県人会
幹事長　北畠正俊

九月初旬、一通の往復はがきが届いた。天栄村立牧本中学校同級会の案内状であった。これまで二・三回同様の案内状を頂いた気もするが、定かではない。今回は時間的余裕もあるので、近況と再会が待ち遠しい旨を記し返送した。

想えば二年前の東日本大震災後は、毎日、新聞紙面に震災、復興の記事が載っている。母県福島の情報はつぶさに読んではいる。少しでも記憶に留めようとも思っている。

しかし、それ以前は果たしてどうであったか？福島の片田舎を出て高度経済成長期の東京へ。その後何度か職場を転々とし、北海道美幌町に移り住んでから四十年が過ぎた。決して良い思い出は残っていなかった小学校、中学校、高校。一枚のはがきを前に、当時の様子を思い出そうとして愕然とする。同級生の名前すら思い浮かばないのである。数年前に相次いで他界した両親の葬儀で世話になった同じ部落の二名を除いて、全くと言って想像も出来ない。

それでも約五十年ぶりに会える楽しみに小さな不安を振り払って十月二十三日朝八時、車で美幌町を出発する。

函館まで約十時間、フェリー四時間、青森から仮眠、休息を取りながら福島の実家に二十四日十六時に着く。片道約千二百キロ、体力気力に多少自信は有ったが、この行程はかなりこたえた。

前もって発起人に出席者名簿を実家に届けて頂くようお願いしてあり、その名簿を見て案の定二名を除いて皆目思い出す事はできなかった。再会し歓談の中で記憶が甦る事も有ると希望を持って、二十六日会場の磐梯熱海温泉ホテル華の湯に向かった。部屋に入り車座になってビールを飲みながら、俺は誰々、私は何々、云々…。相手も私を見てめずらしいものでも見るように首を傾ける。宴会、カラオケと進み、多少分かった様な分からない様な、それでも非常に盛り上がった事は間違いない。記念写真を撮り五年後の再会を約して同級会は終了した。

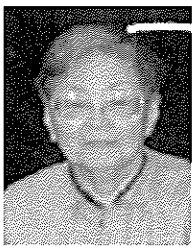
人間の記憶力がどの程度のものか、個人差はあると思うが私の記憶力には正直あきれる。これを期に、今回の震災も含め母県福島にもっと目を向け、少しでも交流を通じて絆を深められるよう、脳の老化を防ぐ努力をしなければ、と感じた一連の旅であった。

新会員紹介

札幌県人会
菅野郁子　二本松市
金田清志　喜多方市
成尾恵二　川俣町
涌井国夫　新地町
涌井美奈子　新地町
長嶺増男　会津美里町
若松謙維　石川町

函館県人会
今野　満　苫小牧市

お悔やみ



上田小八重様（福島県人会北海道連合会顧問・函館福島県人会顧問）におかれましては、平成二十五年十二月二十三日にご逝去されました。（満九十一歳）

長年にわたる県人会活動へのご貢献に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

OBからのお便り

くちびるに歌を、こころに太陽を

第十八代所長　太田崇弘

県人会の皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのことお慶び申し上げます。

北海道から「ふくしま」に戻って、あっという間に九ヵ月が過ぎてしまいました。現在は監査委員事務局企業会計監査課に勤務し、

慣れないながら県立病院や各種財団などの監査を行っています。

さて、早いもので、震災から三年が経とうとしています。この間、残念ながら本県に関してはマイナスの情報が多かったのですが、今回は、少しばかり心が温かくなるお話を二つお伝えしたいと思います。

（その一）震災当時、T銀行相馬支店には、津波に襲われた被災者が多数押しかけていました。支店では、オンラインはもちろん電話を始め全ての通信手段が途絶し、預金残高も確認できない状態でしたが、「通帳も印鑑もないが、泥だらけのジャージ姿で財布一つ持たない人にお金をあげないわけにはいかない」と、原発事故で支店が閉鎖されるまで、一人につき一日十万円を渡し続けました。「お金は戻らなくても仕方ないと思っていたが、なんと全て返済された。『借りたものは返す』という真面目な県民性が今回の完済につながったのかもしれない。」と、T銀行の頭取は回想しています。

（その二）今年度の全日本合唱コンクールでは、郡山第五中学校が、同声（女声）と混声で、ともに文部科学大臣賞を受賞しました。ちなみに、同一校の両部門優勝は六十五回のコンクール史上初の快挙だそうです。

指導者は、前任の郡山第二中学校を合唱の常勝校に育て上げられた小針先生という方ですが、公立の先生に付きものの転勤で、平成二十二年度に現在の第五中学校に異動になってしまいました。第五中学校は合唱では全くの無名校で、四月の赴任当時、部員はわずか十名位しかいなかったとのことです。ところが、その八月には、新入部員を加えた、たった十九名でNHK学校音楽コンクール全国大会出場を勝ち取ってしまいます。（Nコンの全国枠はわずかに十一校、参加千二百校の一％にも満たない狭き門です）。その後、めきめきと力を付け、二十三・二十四年度には、全日本合唱コンクール全国大会で金賞を受賞します。

「♫くちびるに歌を持て、♫こころに太陽を持て・・・・」

二十四年度の「くちびるに歌を」は「感謝と決意の歌声に、ただただ打たれた」（朝日新聞）と絶賛されています。ネット環境がおありの方は、一度お聴きになることをお勧めします。きっと、感動しますから・・・。

ところで、小針先生の持論は、「技術以前に誠実であること。」だそうです。

本人確認も十分にできない中でお金を渡し続けた銀行、借りたものは真面目に返す県民性、誠実さを第一に考える指導者、指導を理解し立派に応える子供たち、私は、こんな「ふくしま」を心から誇りに思います。

さて、少しだけ私事を書かせていただきます。福島市の自宅は、震災でサッシが歪んだせいか隙間風がひどく、北海道での快適さに慣れた身には寒くて耐えられない状態です。内窓（既製品）が効果的とは分かっていますが予算も折り合わないので、現在、「室内北海道化計画」と称して地道に窓を自作しています。「くちびるに歌を、こころに太陽を、隙間風には内窓を・・・。」

施工前

施工後

最後になりますが、会員の皆様のご健勝と、各県人会の益々のご発展をお祈り申し上げ、併せて、今後とも「ふくしま」を暖かくお見守りくださるようお願いして、新年のごあいさつといたします。

編集後記

ふくしま・日本酒・日本一！

平成二十四酒造年度全国新酒鑑評会で福島県の日本酒が金賞受賞数日本一（金賞二十六銘柄）に輝きました。

平成二十五年度の結果も、五月中旬頃発表になると思いますが、第四十二回連合会総会で、吉報をお伝えできると信じています。